

藍と青 留萌YEG

青年部よ、自ら箸を取れ！ 留萌の荒波のような厳愛を背に ふるさと納税事業に挑むワケ

今年度のYEGフラッシュは、商工会議所（親会）とYEGの良好な関係をご紹介します。タイトルの「藍と青」は、浪沢栄一翁の生家の家業が藍農家であったことから、藍を親、青をYEGとし、一般的にいわれる師弟のことではなく、「君子曰く、学は以て日（や）むべからず（学問は中断してはいけない。努力すればするほど精練されて優れたものになる）」という本来の意味に立って取材します。

世界三大波瀾の一つに数えられる留萌の荒波。かつて炭鉱とニシン漁で栄えたまちは、その荒ぶる大波を生む過酷ともいえる季節風を生かした自然エネルギー産業と港湾関連事業で変わろうとしている。変化の波を受け、地域の魅力をPRする新たなアイデアで動き出した留萌商工会議所青年部と、その成長を願う挑戦を見守る留萌商工会議所の思いを取材した。

祭りの花形を任せられ 少人数ながらも躍動

2024年7月27日。留萌市の中心市街地を小さき山車が練り歩く。「あんどん」と呼ばれる山車が練り歩く。その中でも最大を誇る高さ7m、長さ20mの「広報あんどん」を引くのは留萌商工会議所青年部（以下、YEG）だ。この祭りの前身となる留萌商工港



広報あんどんに乗ってあいさつする大石会頭



呑清まつり前夜祭の大石会頭（左）と松村会長

新たな挑戦への支援が 当たり前でない理由

広報活動を全面的に任せている。YEGメンバーは、親会の期待を受け、市民の力を借りながら祭りの成功に向けて全力を尽くす。一時は60人を超えていたYEGだが、人口減少の影響もあり今の会員数は29人。しかし、YEGの松村剛会長は「自己研鑽だけでなく、まちを盛り上げるために何かしたいという思いは強くなっている」と語る。これまでは同じメンバーが役職に就いてきたが、今年度は「挑戦」のスローガンの下、入会歴の浅いメンバーが役職を得て活躍し、新しいメンバーを誘う流れをつくる取り組みを行っている。

今年、YEGは新たな試みとして、留萌市のふるさと納税返礼品への商品登録事業に挑戦することを決めた。19年度は約2億8000万円だった留萌市のふるさと納税額は、22年度には約10億5000万円、23年度に

は約21億円と年を追うごとに増えていた。このデータに着目したYEGは、さらに同市の魅力をPRするために、メンバー個々の企業ではなくYEGが主体となって出品することにした。YEGが企画しているふるさと納税の返礼品は、何と「雪」。例年12月には積もり始める留萌の雪を、雪だるま型の発泡スチロールに入れ、人気の海産物などとセットにして売り出す作戦だ。売り上げはYEGの事業費に充てていく。松村会長は「二つの企業の商品だとその企業しか利益が出ませんが、われわれのような団体だとあちこちの企業から集めて詰め合わせにすることが出来ます。それで留萌を盛り上げていきたい」と意気盛んだ。

そうはいつても、ふるさと納税返礼品事業者としてインボイス制度の登録番号を申請するには、親会の協力が不可欠である。また、事業を行うには資金も必要だ。YEGの予算だけでは挑戦するには心もとない。親会はYEGに対し、常議員会でプレゼンテーションし、可決されたら予算を付けることを約束した。

親会の大石昌明会頭は「当初、ふるさと納税に挑戦する話をYEGから聞いたとき、留萌の魅力を発信したいということ、留萌のふるさと納税に興味を持って、それをどうにか自分たちで商品開発したいと考えたことを約束した。 験を積める絶好の機会となる。大石会頭は「成功しても失敗しても、自分たちの経験や業績として積み上げていってほしいですね」と穏やかに笑い、松村会長は「うまくいくかは分かりませんが、購入してくれた人に喜んでもらえる商品を開発できるように精いっぱい努めたいです」と意気込みを示した。



広報あんどんを引いた留萌YEGメンバーと有志

会頭はYEGに対して、これからも事業費の出所や使い方をきちんと考えてほしいからこそ、簡単に予算を捻出することは決してしない方針だ。「ぱっと聞くと厳しいと思ってしまいますが、よくよく考えれば親会の優しさだと理解できます。メンバーにもその思いを伝えたいです」と松村会長は前向きに受け止めている。納得できる事業の提案があればいくらかでもYEGを支援するという意向を示しながら、あえて課題を与えたところに親の愛を見た。

青年経済人の成長が まちの希望

「親会の役員、議員、職員も、一つのピースとして皆でまちを盛り上げていくことが大事です。一人一人が動くことでこのまちが良くなると確信しています」と大石会頭。さらに「何かを与えられるのではなく、何をやるかは自分たちで考えて決めてほしい。まちの活性化にいかにか真剣に取り組んでくれるかを期待して見守っています」とYEGに自ら箸を取ることを求めている。それは、留萌の10年後、20年後の産業を担う人材は、ほかでもないYEG世代だからだ。

留萌市は人口1万8000人余りのまちである。炭鉱は閉じ、ニシン漁もかつての勢いはない。鉄道も廃線



「挑戦」のスローガンの下に集う留萌YEG

編集後記 村本 静 (宮古島YEG) 松村会長の掲げる「挑戦」のスローガンの下、各自が当事者意識を持ち「自らやらずらくては」と果敢に活動に励む留萌YEGと、それを温かくバックアップしながら期待を寄せる親会の絆は、留萌の黄金岬から望む海よりも深く、波瀾よりも強く結ばれていることを感じました。今回、取材にご協力を賜り、心より感謝申し上げます。皆さまの心がたくさんの夢であふれ、心豊かに過ごせますように。うれしい便りであふれますように。

留萌商工会議所 会 頭：大石昌明 会員数：577人 創 立：1947年 住 所：北海道留萌市錦町1-15 留萌YEG 会 長：松村剛 会員数：29人 創 立：1991年 スローガン：「挑戦」〜勇往邁進 We can do it!〜 HPIはこちら